

新刊
紹介

"... the difference between a college man and a man lacking in college is that he has the resource of books, that he knows there's a book side to every-thing."

吉武堯右著（商学部教授）「経営の見かた考
え方」発行所、東京、有紀書房、新書判二
二二頁、定価三六〇円。

著者はまえがきでこんなことを述べてい
る。「経営学とは『人間学』であり、その
一分科としての経営分析論は『人間分析
論』でなければならないと考えている。つ
まり、企業の生活過程にあらわれる諸現象
の透視としての、人間のヴァイタルフォー
ルの完全燃焼をはかることこそ、経営学の
ニューフロンティアであらう」と。さき
に、同著者によって「経営能率分析」「経
営診断」「原価分析」が著述せられたが、

これにひきつづいて、ここに「経営学のニ
ューフロンティア」を開拓しようとして企
図されたのが本書である。智に働かず、情
に棹ささず、このため本書は、世のブーム
のつて巷に氾濫する経営「学」、会計「学」
の無味乾燥な学の知識と、経営ビジネスの
「技術」から離れて、産業人としての新し
い個性の形成と、経営の新しいエネルギー
の創造を目指して執筆されたもの。したが
ってこの書の内容は、利潤、賃金、人間
の三部をもつて構成されているが、著者の
もつとも重点をおいているのは人間ではな
かろうか。経営の基礎となるものは経営思
想であり、その人間分析であると主張する。
新しい経営思想の確立——そして「新しい
経営のエネルギーは、生命力からしか生ま
れない」と。

豊富な表現、豊かな人間性、しかも客観
に徹しようとする著者のいぶきがどの頁に
も感じられ好著。

西村諭通編（経済学部教授）「労働問題用語
辞典」発行所、東京、三一書房、新書判三
三〇頁、定価六八〇円。

戦後に生まれ、今日、職場の第一線にお

いて労働に従事し、生産と組合の仕事の中
核的なない手となりはじめている青年の
なかにも、二・一ストや電産型賃金をまっ
たく知らない青年がその数をまじつつある
という。

日本の労働問題を理解する場合に二つの
ミゾに直面する。その一つは戦前数十年に
わたる日本の労働問題と、今日のそれとの
遮断であり、いま一つは、特殊日本的な孤
立性のゆえに国際的視野からの壁である。

この辞典はこうした要請にこたえ、「労働
運動に関する用語の解説のみならず、労働
問題全般にわたる総合的な知識が簡単に修
得できる」ものとして企画された。その解
説している用語二千数百項目。

本書はつぎの十名の分担執筆者による共
同力作である。賃金西村諭通、同大、労
働条件（竹中恵美子、大阪市大、労働市場
（西口俊子、大阪市大）、労務管理（浅野敏
和、歌山大）、労働組合（前川嘉一、京大）、労
働者福祉・社会保障（小川喜一、大阪市大）、
政治・社会思想（吉村勲、大阪市大）、労働
法・労働政策（片岡昇、京大）、労働・社会
運動史・人名（与田桓、大阪経大）、労働・

政経問題（山本正治郎、大阪市大）。

巻末に系統別の組合編成表、欧米ならびに日本の労働運動史年表および西暦、日本暦対照表が付せられている。本書はたんに労働問題の実務家のみならず、政治・社会問題の小辞典としても好個のものといえよう。

田畑教授還暦記念論集 発行所、同志社法学会、A5判四六四頁、定価八〇〇円。

法学部の研究誌「同志社法学」はこのほどその第78号を田畑忍教授還暦記念号として刊行した。田畑忍教授は、周知の如く、憲法研究所を主宰し、関西における平和憲法擁護運動の理論的支柱として活躍するとともに、後進の指導、育成にも献身的に努力されている。それだけに本号の執筆者もきわめて多彩である。

本書は前半に政治学論文、後半に法学論文が集められている。政治学論文には、今井仙一教授の「中間者としての人間について」を巻頭に、長年ラスキ研究を続けて来られた岡田良夫京大助教授の「右翼社会民主主義者とラスキの思想的変遷の問題」をはじめ、高知短大の高橋信司教授の「天皇

観念の変遷」、雑誌「歴史評論」を中心に著述活動を続けている中瀬寿一氏の「明治デモクラシーのナショナルリズムへの転換」、人文科学研究所員の太田雅夫、「天皇制意識の分析」などの諸論文がある。法学論文では島本英夫教授の「ノース・カロライナの議決権信託制度」、秋山哲治教授の「刑法解釈における相当性の概念」、大阪大の熊谷開作教授の「徴兵令における『家』と国家」をはじめ、高知短大の芳野勝助教授の「単純な届出制について」、海原裕昭助教授の「社会的法学の思想性」、三重短大の杉江栄一助教授の「フランス五八年憲法における条約法形成手続」らの新進の研究者の論文を載せている。

本号の特色は単に同志社だけでなく、関西諸大学や学界で活躍している研究者の論文が集められていること、執筆者の半数以上が田畑教授の指導を受けた新進気鋭の学究であることなど、同教授の影響力の広さを示している。

おわりに、本号をなによりも還暦記念号にふさわしいものになっているのは上田勝美氏の「田畑憲法学の特質」である。同氏は

現在、田畑教授の膝下にあつて憲法研究所の助手をしている人。歴史的客観主義に立つ田畑憲法学の方法論として①解釈対象としての憲法に則して、論理的客観的に冷静に且つ体系的にその規範的意味内容を理解すること、②解釈者の主観を通して解釈対象としての法を客観的に認識しうること、③憲法解釈学のもつ政治性を肯定し、多種多様の政治性を有する憲法学の存在を肯定すること、の三つをあげてその特質を論述しており、巻末の「田畑教授の略歴および著作目録」とともに同教授の思想系譜を知らうえに最適のものである。

しばらく二号、発行所、同志社女子大学、A5判八四頁。

本書は同志社女子大学の学報（年刊）である。本号ではとくにリベラル・アーツについてE・L・ヒバード、酒井康、杉瀬裕の諸教授が寄稿し、大学教育が曲り角に来ていると言われるおり時宜をえた読み物となっている。このほか経営・教育活動についての報告が要領よくまとめられ、同校の現状と動向を具体的に知ることができる。